

冬季研究協議会の第一部、読書会のご案内を致します。

- 1 日時 平成26年度12月26日(金) 14:00~17:30
- 2 場所 首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス会議室D・E
- 3 ミシェル・フーコー, 中山元訳, 2008, 『わたしは花火師です』筑摩書房(ちくま学芸文庫), 222p.

収録内容: 「わたしは花火師ですー方法について」(ドロワとの対話, 1975年)

「哲学を厄介払いする一文学について, これまでの軌跡について」(ドロワとの対話, 1975年)

「批判とは何かー批判と啓蒙」(フランス哲学協会での発表, 1978年)

「医療化の歴史」(リオデジャネイロ国立大学での講演, 1974年)

「近代技術への病院の統合」(リオデジャネイロ国立大学での講演, 1974年)

4 コメントなど

今回の読書会では、没後30年を迎えたミシェル・フーコー(1926-1984)の文献を取り上げます。フーコーについては、「倫理」の教科書でも1980年代から徐々に取り上げられ、現在では多くの教科書で言及がみられます。

フーコーについて石田(2006)は、「フーコー以前とフーコー以後では、すべてが一変してしまっている。フーコーは、私たちの「知の地平」を画している巨人なのだ」(テキスト案内⑤, p.16)と評しています。フーコーの提起した問題は多岐にわたり、自己や言説、監視社会、医療など、現代社会における様々な課題を考える上で重要な視点を有しています。

『監獄の誕生』に代表されるように、フーコーの著作は、長大で難解なイメージがありますが、今回選定した『わたしは花火師です』は、対話や講演の記録が5編収められたもので、フーコー自身の言葉で主要な著作につながる論点を比較的わかりやすく端的に捉えることができます。特に、「批判とは何か」では、カントの「啓蒙とは何か」に引き付けながら、フーコーの探究してきた課題と方法の核心が論じられています。また、「医療化の歴史」、「近代技術への病院の統合」では、『狂気の歴史』や『臨床医学の誕生』、『監獄の誕生』といった著作とも関連の深い医療化や規律の問題が論じられています。

この読書会を通して、「倫理」の授業でフーコーの思想を如何に取り上げることができるのかを探究するとともに、「倫理」という科目に内在する課題をフーコーの提起した視点から見直していきたいと考えています。

どうぞ宜しくお願い致します。

5 テキスト案内

■関連するフーコーの著作として

- ①ミシェル・フーコー, 神谷美恵子訳, 1963=1969, 『臨床医学の誕生』みすず書房。
- ②ミシェル・フーコー, 中村雄二郎訳, 1969=2006, 『知の考古学』河出書房新社。
- ③ミシェル・フーコー, 田村俣訳, 1975=1977, 『監獄の誕生』新潮社。
- ④ミシェル・フーコー, 石田英敬訳, 1984=2006, 「啓蒙とは何か」『フーコー・コレクション6 生政治・統治』筑摩書房, pp.362-395.

■フーコーの概説書として

- ⑤小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編, 2006, 『フーコー・ガイドブック』筑摩書房。
- ⑥内田隆三, 1990, 『ミシェル・フーコー』講談社。